軍歌をくちずさむとき

高木鶴子（本町・60歳）

先生の　顔見てわかる　友の死が
悲しさに　軍歌叫びつゝ　工場へ
前線へ　おれのばんだと　学徒生
今日も又　戦地へ行く人　にぎりめし
旋盤の　音にまみれて　バカヤロー
けんぺいの　目をばぬすんで　英会話
一ッ服　寝まき起きまき　外出着
前線へ　今日は誰かと　家を出る
神風の　はちまきしめて　勝利祈る
サイレンの　なるたび毎に　泣く赤子
連日の　敵機しゅうらい　ふてくさり
目をみはる　照明だんに　たちすくみ
黒雲と　見まごうばかりの　B29
焼夷弾　強雨の様な　音をたて
くにの為　歯をくいしばる　やけのはら
焼夷弾　まつ毛迄やく　黒い顔
皆やけて　行くとこ無しの　ていしん隊
いくたびか　死ぬるばかりの　日々つゞき
悲惨さに　ぼうぜんと見る　死人山
いくたびも　校しゃにもどる　夢を見る

体験（横浜市　女学校二年～三年学徒挺身隊）

忘却の彼方に追いし軍歌をば

軍歌をうたう私たちを若い人は「また軍歌か」と云ったような顔をし、私達が戦争を懐かしんででも居るかのように半ば軽べつ的なまなざしでながめる人もおりますが、軍歌を歌いながら心で叫びたい、

「あなた達に何がわかるものか。戦争をきらうのはあなた達よりも此の身で戦争の悲惨を味わっている我々のほうがはるかに強いのだ。」

と思います。

戦争を知らない人達、軍歌を知らない人達の本当の平和が訪れることを願いながら、軍歌をうたう人達がだんだんと消えてゆくでしょう。

「軍歌」、それは忘れ去られようとしている人達の霊に贈る歌だと思っていただきたいのです。